

法政大学講義録

横田, 五郎

(出版者 / Publisher)

法政大学

(巻 / Volume)

24

(号 / Number)

特別法

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

18

(発行年 / Year)

1905-03-07



（昭和三十一年十月十二日第三種郵便物認可）
（毎月四回七日八日十八日二十八日發行）

明治三十八年三月七日發行

特別法ノ二十四

法政大學講義録

第百貳拾叁號

法政大學發行

特別法第二十四號目次

非訟事件手續法(自七三至九八)

法學士 横田 五郎

雜報 ○町村助役ノ戸籍及ヒ身分登記事務ノ管掌 ○町村役場書記ト監守 盜罪

稟告

本誌ニ於テハ大ニ紙數ヲ增加シテ前誌ノ不足ヲ補フヘク撰登ノヤルモ松浦律師ハ帝國議會開會ノ爲メ多忙ニ付キ今村議員ハ公用ニテ出張ニ付キ杉本議員ハ病氣ニ付キ遂ニ本意ヲ達スルコト能ハザリシハ大ニ遺憾トスル所ナルモ次號分ニハ奮テ歸陣ノ執筆ヲ請ヒ必ス再度ノ不足ヲ補フコトヲ期ス體裁請フ所ヲ記セヨ

090
1903
5-24

一八六條乃至第一九二條其他

疏明ノ方法ニ付テハ疏明ニ關スル民事訴訟法ノ規定ヲ準用スヘキモノトス(本法第一〇條)而シテ非訟事件ニ於テ疏明ヲ要スル規定ハ本法第三十一條第三百三十三條第四百十三條第六十三條及ヒ本法ニ準用スヘキ民事訴訟法第三百三十三條ニ付テハ同法ニ準用スルモノトス(本法第六十三條)民事訴訟法ニ於ケル非訟事件手續法上證明ト疏明トノ法律上ノ性質ニ付テハ民事訴訟法ニ於ケル區別ト異ナルモトナレ裁判所カ或事實ノ存在ニ付キ絕對の心證ヲ得タルトキハ其事實ハ證明セラレタルモノニシテ裁判所ハ其事實カ存在スルコトヲ信用スルニ足ルトキハ其事實ハ疏明セラレタルモノトス事實ノ不存在ニ付テハ證明及ヒ疏明ノ區別亦同シ故ニ疏明ニ因リテハ絕對の即チ客觀的眞實ニ達スヘキモノニ非ス事實存否ノ有無ニ付キ疏明セラレタル場合ト雖モ裁判所ハ證據ニ因リテ反對ノ事實ヲ認メ得ルモノトス(本法第六十三條)民事訴訟法ニ於テハ疏明方法ト證據方法ト異ナル重要ノ點ハ證據調ノ職權主義ナルニ反シ疏明方法ニ付テハ當事者放任主義ヲ採用スルニ在リ故ニ疏明ハ總テ

非訟事件手續法 總則 非訟手續 裁判所ノ手續

ノ場合ニ於テ申立ノ原因ニ伴フモノニシテ當事者自ラ之ヲ爲シ裁判所ハ疏明ニ付テ一ノ材料ヲ蒐集スルコトヲ妻セザルモノナリ然レドモ固ヨリ裁判所ハ其疏明ノ爲メニ又ハ疏明ニ反對スル所ノ即チ裁判所ニ依リテ知ラレタル事情ヲ斟酌シテ判斷スルコトヲ得ルナリ

疏明ノ方法トシテハ民事訴訟法第二百二十條ノ規定準用セラルル從テ疏明方法ニ付テハ人證及ヒ鑑定ニ限ラサレハ勿論書證ノ如キハ殊ニ此方法ニ最モ適切ナルモノナリ

非訟事件手續法ニ於テハ豫先手續ニ付キ何等ノ規定ナシ故ニ事件開始前ノ證據調ニ向テモ亦何等ノ規定ナク從テ證據保全ニ關スル民事訴訟法ノ規定ハ非訟事件ニ付テハ明カニ準用スルコトヲ得サルモノトス加之非訟事件ニ於テハ事件ノ確定ニ付キ必ズシテ形式的證據調ヲ要セザルヲ以テ豫メ證據保全ヲ爲スル如キハ之ヲ必要トセザルヲ以テナリ

第三節 裁判手續

裁判所ノ行爲ニハ單純ナル事實上ノ行爲ト法律上ノ行爲トノ二種アリ單純ナル事實上ノ行爲トハ直接ニ法律上ノ效果ヲ生スヘキモノニ非ス單ニ法律上及ヒ事實上ノ點ニ於ケル判斷ヲ準備スヘキ裁判官ノ行爲ニ過キス(例之法律問題ノ審査ノ如シ)之ニ反シテ裁判所ノ行爲カ一定ノ法律上ノ效果ヲ生スルモノアリ非訟事件ニ於ケル所謂裁判ト稱スルモノハ則チ是レナリトハ裁判ハ法律上ノ性質ヨリ之ヲ二個ニ區別スルコトヲ得即チ事件ノ指揮的行爲及ヒ終局的(本案裁判行爲)是レナリ

一事件ノ指揮的行爲トハ民事訴訟法ニ所謂訴訟ノ指揮ニ該當スルモノニシテ期日ヲ指定シ私署證書ノ認證ヲ受クヘキ旨ヲ命シ又ハ必要ナル事實ヲ探知若クハ證據調ヲ爲スカ如キ行爲是レナリ

二終局的即チ本案ノ裁判行爲トハ民事訴訟法ニ所謂訴訟ノ裁判行爲ニ該當スルモノニシテ裁判所ノ行爲ヲ完結スル所ノ行爲ヲ云フ

第一款 裁判ノ形式

非訟事件手續法第十七條第一項ニ依レハ裁判ハ決定ノ形式ヲ以テ之ヲ爲スモ
ノトス玆ニ裁判ト稱スルハ所謂終局的(本案)裁判ヲ謂フ

裁判ヲ決定ノ形式ヲ以テ爲ス理由ハ非訟事件手續法ノ大原則タル手續ノ簡易
ト勞費ノ節減主義トニ基クフミナラス口頭辯論主義ヲ採用セラル自然ノ結果
判決ヲ以テ爲スコトヲ得サレハナリ

裁判ハ決定ヲ以テ之ヲ爲スモノナルカ故ニ判決ニ於ケルカ如ク民事訴訟法第
二百六十三條ニ掲ケタル各要件ヲ必要トセス而モ特別ノ方式ナキニ因リ裁判
所ハ任意ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ即チ決定ニ必スシモ事實ヲ記載
スルコトヲ要セス又理由ヲ附セザルモ敢テ妨ナシ從テ直チニ申請書ニ申請ヲ
許可ス又ハ申請ヲ却下スト記載スルモ敢テ不備ニ非ス尤モ法律上裁判ニハ理
由ヲ附スヘキ旨ヲ規定スル場合ニ於テハ勿論例外ナシテ必スヤ其裁判ニハ理
由ヲ附セザル可カラズ例之

一、抗告裁判所ノ爲シタル裁判(本法第二三條)ハ之ヲ以テ爲スコトヲ得
二、商法第二百二十四條第二項ノ規定ニ依ル裁判(本法第一二九條)ハ之ヲ以テ爲

三、商法第一百一條第二項ノ規定ニ依ル検査ノ許可申請ニ付テノ裁判(本法第
一二三條)

四、商法第六十條第二項ノ規定ニ依ル總會召集ノ許可申請ニ關スル裁判(本
法第一二六條)

五、商法第四十七條第四十八條及ヒ商法施行法第二百十條第二項ノ場合ニ於
ケル會社解散ノ命令ノ裁判(本法第一三四條)

六、登記ノ申請カ商法又ハ非訟事件手續法第三章ノ規定ニ適セザル理由ヲ以
テ之ヲ却下スル裁判(本法第一五一條)

七、商法第二十四條第一項ノ規定ニ依リ商業登記抹消ノ申請ニ對スル異議ニ
付キ登記所ノ爲シタル裁判(本法第一六五條)

八、過料ノ裁判(本法第二〇七條)

條第二項

裁判ノ正本及ヒ謄本キハ書記署名捺印シ尙ホ正本ニハ裁判所ノ印ヲ押捺スヘキモノトス同條第三項

非訟事件手続法ニハ如何ナル場合ニ正本ヲ付與シ又如何ナル場合ニ謄本ヲ付與スヘキカニ付テハ何等ノ規定ナキモ元ト元本正本謄本ノ區別ハ民事訴訟法ニ規定シアルヲ以テ此等ノ點ニ付テハ彼此ヲ區別スル理由ナキヲ以テ民事訴訟法ノ規定ヲ準用スヘキモノトス即チ正本ハ執行ヲ要スル場合ニ付與スルモノニシテ其他ノ場合ニハ謄本ヲ下付シテ可ナリト信ス

第二款 裁判ノ效力

裁判所カ其裁判ヲ發表スル時期ト其裁判ノ效力ヲ生スル時期トハ法理上區別アリ裁判カ發表セラレタル間ハ單ニ裁判所職員ノ内部ノ意思ニシテ裁量ニ於ケル法律上所謂裁判ニ非ス單ニ草案ニ過キサルヲ以テ何時ニテモ之ヲ變更スルコトヲ得ルモノトス裁判カ發生シタルモノトシテ觀ムヘキ一定ノ形式及ヒ

時期ニ付テハ非訟事件手続法上何等ノ規定ナシ故ニ發表ノ時期ノ如キハ裁判所ノ意思ニ繫ルモノニシテ何時發表シタルモノト認ムヘキヤハ全ク事實上即チ解釋上ノ問題ナリ本法第十八條第一項ニ基キ裁判カ言渡ニ因リ告知セラレタル時ハ裁判カ同時ニ發表セラレタルモノナルコト勿論ナルモ其他ノ場合ニ於テハ裁判官カ決定ノ上署名捺印シテ書記ニ原本ヲ交付スルトキハ裁判ノ發表アリタルモノトス而シテ裁判發表ノ時期ヲ定ムルコトハ極メテ必要ナルコトナリ何トナレハ此發表アリタル後ニ非サレハ第十八條第一項ニ依リ裁判ヲ告知スルコト能ハサレハナリ

第一裁判ノ效力ノ發生

非訟事件手続法第十八條第一項ニ依レハ裁判ハ其内容ニ從ヒ其裁判ヲ受クル者ト定マリタル關係人ニ告知スルニ依リテ效力ヲ生スルモノナリ茲ニ所謂裁判モ亦本案ノ裁判ナルヲ以テ其他ノ裁判即チ裁判所ノ純粹ナル事務上ノ命令ニ付テハ適用セラレヘキモノニ非ス例之裁判所書記若クハ執達吏ニ對スル指揮、他ノ官廳若クハ他ノ裁判所ニ對スル囑託ノ如キ又ハ公簿ニ登記スルカ如キ

之ニ包含セラレタルモノトス。惟ス、調停、成子及ハ和解ニ對シテハ或テ裁判ノ告知ハ裁判所ノ相當ト認ムル方法ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ得故ニ言渡ノ方法ニ依リテモ或ハ送達ノ方法ニヨリテモ告知ヲ爲スコトヲ得ヘク住所不明ノ者ニ對シテハ公示送達ノ方法ニ依リテ之ヲ爲スヘク又ハ告知ヲ受クル人ヲ裁判所ニ呼出シテ裁判ヲ通知スルコトニ依リテモ之ヲ爲シ得ヘク又單ニ裁判ノ原本ヲ交付シテ之ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ本法第一八條第二項但法律ニ於テ特ニ裁判ノ送達ヲ要スル旨ノ規定アル場合例之本法第五百一條ニ於ケル如キ場合ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒテ特ニ之ヲ申請人ニ送達ヲ爲スニ非ラレハ效力ヲ發生セザルモノトス。但シテ此ノ限ニテモハ或レハ或レノ場合ニ此ノ如ク裁判ハ告知ニ依リテ效力ヲ發生スルモノナルヲ以テ告知ノ有無ハ事件ノ關係人及ヒ裁判所ニ對シテ重要ナル關係ヲ有スルカ故ニ告知ノ方法場所及ヒ年月日ハ之ヲ裁判ノ原本ニ記入シ以テ後日爭ノ途ヲ杜絶セザルベカラス（本法第一八條第三項）

第二裁判ノ效力ノ範圍手續式上調停ノ發案ニ對シテ調停ノ成子及和解ノ

裁判ハ職權上ノ行爲ナルカ故ニ裁判カ效力ヲ生シタル瞬間ヨリ其裁判ノ内容ニ從ヒ單ニ之ヲ受クル者ニ效力アルノミナラス總テノ人ニ對シテ效力ヲ有スルモノナリ而シテ一私人ハ勿論官廳又他ノ民事刑事或ハ行政裁判所ト雖モ其裁判ノ正當ナルヤ否ヤヲ調査ヘキ權能ヲ有セス此裁判ハ非訟事件手續法ニ從ヒ不服申立ノ方法ニ依リテノミ審査ヲ求ムルコトヲ得ヘキモノトス然レトモ其裁判カ形式上當然無効ナルトキハ何人ト雖モ之ニ服從スルノ義務アルモノニ非ス

第三款 裁判ノ取消及ヒ變更

正當ナル權利者ヲ保護スルハ法律ノ目的ニシテ殊ニ職權主義ニ基ク手續ニ於テハ人力ノ及フ限リ絕對的眞實ヲ發見シ以テ權利者ヲ保護セザルベカラズ從テ此目的ヲ徹底セシメント欲セハ既ニ裁判ヲ爲シタル場合ト雖モ之カ取消又ハ變更ヲ許スニ非ラレハ該目的ニ到達スル能ハサルナリ彼ノ裁判ニ確定力ヲ生スル如キ法規ハ該目的ニ反スルモノナルヲ以テ職權主義ニ基ク手續ニ於テ

ハ裁判ハ何時ニテモ之ヲ取消シ又ハ變更スルコトヲ得ルモノト爲ササル可カラズ然レトモ場合如何ヲ問ハズ該目的ヲ一貫セント欲セハ權利ノ不安ヲ生シ四民其途ニ迷ヒ却テ公益ニ反スヘキヲ以テ或場合ニ於テハ假令裁判ニ不當アリトスルモ之カ取消又ハ變更ヲ爲サンヨリハ寧ロ速ニ權利ヲ確定スルヲ以テ優レリト爲スコトアルヘシ民事訴訟手續ニ於テ裁判ノ確定力ナルモノヲ認メタル所以亦爰ニ在リ然ルニ非訟事件手續ニ在テハ一方ニ於テ權利ノ安全ヲ欲スルヨリ或場合ニハ民事訴訟ニ於ケルカ如ク裁判ノ確定力ヲ認メタルモ他方ニ於テハ職權主義ニ基テ結果絕對的眞實ヲ發見セント欲スルヨリシテ裁判ノ確定力ナルモノヲ認メサル場合アリ既ニ確定力ヲ認メストスレハ裁判所自ラ爲シタル裁判ヲ不當ナリト認メタルトキハ何時ニテモ之カ取消又ハ變更ヲ許スニ非サレハ絕對的眞實ヲ發見スルコト能ハサルヘシ是非訟事件手續法第十九條第一項第二項ノ基テ精神ナリトス

民事訴訟法ニ於テハ裁判所ハ其言渡シタル裁判ニ羈束セラレルヲ以テ民事訴訟法第二四〇條原則トシテ自ラ爲シタル裁判ヲ同一裁判所ニ於テ取消又ハ變

更スルコトヲ得ナルナリ唯民事訴訟法第百二十三條第百二十四條第百六十九條第百五十九條其他訴訟指揮ニ關スル裁判ニ對シテハ自由ニ變更スルコトヲ得ヘキノミ之ニ反シテ非訟事件手續法ニ於テハ職權主義ニ基テ結果絕對的眞實ヲ發見セント欲スルヨリシテ原則トシテ其爲シタル裁判ヲ不當ト認メタルトキハ何時ニテモ取消又ハ變更スルコトヲ得ヘシ即チ職權ヲ以テ爲シタル裁判ハ常ニ職權ニ因リテ取消又ハ變更スルコトヲ得ルモノトス(本法第一九條第一項)

裁判所カ不當ト認ムルニ付テハ必スシモ裁判自體ニ不當アルノミニ限ラス其裁判ヲ爲シタル後新タニ生シタル事由ニ因リテ其裁判カ眞實ニ合致セサル場合ニ於テモ亦其裁判ヲ不當ト認メテ之ヲ取消又ハ變更スルコトヲ得ルモノトス又非訟事件ニ於ケル裁判ハ實質上判決ト異ナル判決ハ既ニ存在シタル權利ヲ確定スルモノニシテ其判決確定シタルトキハ最早之ヲ變更スルコト能ハス從テ他ノ判決ニ依リテ影響ヲ受ケルコトナシ之ニ反シ非訟事件ノ裁判ニ因リテ生レタル權利ハ當然其他ノ裁判ニ依リテ影響ヲ受ケルモノナリ此點ニ關シ

テハ法律上何等明文ナキモ固ヨリ當然ノコトナリトスルモノハ、
 各裁判所ハ訴訟事件手続法第十九條ニ依リテ自ら爲シタル裁判ヲ取消スルコト
 ヲ得ルモノトスルモノハ、
 一、第一審裁判所ハ自己ノ爲シタル裁判カ之ニ對シ不服申立ノナキ間ハ勿論
 合ニ抗告ノ申立アル場合ト雖モ未ダ抗告裁判所ノ裁判ナキ間ハ任意ニ裁判ヲ
 取消又ハ變更スルコトヲ得尙ホ抗告カ棄却セラレタル場合ニ於テモ自由
 ニ之カ取消又ハ變更ヲ爲スコトヲ得ルナリ然レトモ再抗告カ提起セラレ
 タルトキハ之カ取消又ハ變更ヲ爲スコトヲ得サルモノトス(普國カンヤル
 裁判所判例蓋シ此場合ニ於テハ第一審ノ裁判ハ依然トシテ存立シ之ニ對
 スル攻撃方法カ棄却セラレタルモノナレハ其後ニ至リ裁判ヲ變更スルコ
 トハ自己ノ裁判ノ變更ニシテ上級審ノ裁判ノ變更ニ非サルヲ以テナリ之
 ニ反シテ抗告カ理由アリテ第一審ノ裁判變更セラレタルキハ最早自己ノ
 裁判ナルモノナキヲ以テ第一審裁判所ニ於テ之ヲ取消又ハ變更スルコト
 ヲ得サルモノナリ)

二、第二審即チ抗告裁判所ハ自己ノ爲シタル裁判ニ對シ再抗告ノ提起ナキト
 キ又ハ再抗告カ却下セラレタルトキハ自ら裁判ヲ取消又ハ變更スルコト
 ヲ得ルナリ(グリユホート雜誌第三十六號第七百十七頁然レトモ自己ノ爲
 シタル裁判ト雖モ單ニ抗告ヲ棄却シタル裁判ハ取消又ハ變更スルコトヲ
 得サルモノトス何トナレハ抗告ハ申立ナルヲ以テ非訟事件手続法第十九
 條第二項ノ此場合ニ適用セラレルヲ以テナリ尙ホ裁判カ第三審ニ於テ變
 更サレタルトキハ一ニ述ヘタルト同一理由ニ依リテ第一審裁判所ニ於テ
 取消又ハ變更スルコトヲ得サルモノトス
 三、第三審即チ所謂再抗告裁判所ハ自己ノ爲シタル裁判ヲ取消スコトヲ得ル
 ナリ然レトモ再抗告ヲ却下シタル裁判ハ二ニ述ヘタルト同一理由ニ依リ
 テ取消又ハ變更スルコトヲ得サルモノトス
 斯ノ如ク裁判ハ常ニ同一審ニ於テ取消又ハ變更スルコトヲ得ルヲ原則トスレ
 トモ之ニ對シ例外ナキニアラス即チ
 一、申立手續即チ申立ニ因リテノミ裁判ヲ爲スベキ場合ノ手續ニ於テ申立ヲ

一 却下シタル裁判ハ申立ニ因ルニ非サレハ之ヲ取消又ハ變更スルコトヲ得
 ス本法第一九條第二項蓋シ申立ナキニ裁判所カ職權ヲ以テ之ニ干渉スル
 必要ナキノミナラス當事者ノ意思如何ヲ顧ミシテ裁判ヲ爲ストキハ却
 テ弊害ヲ生スル虞アレハナリ加之法理上一旦申立ヲ却下シタル以上ハ既
 ニ當事者ノ申立ナキヲ以テ裁判所ノ之ニ干渉スヘカラサルヤ當然ナレハ
 ナリ

二 確定シ得ヘキ裁判即チ即時抗告ヲ以テ不服ヲ申立テ得ル裁判ハ之ヲ取消
 シ又ハ變更スルコトヲ得ス
 確定力ノ如何ニ付テハ非訟事件手續法ニ何等ノ規定ナキヲ以テ他ノ法
 律殊ニ訴訟法ニ基キ類似解釋ヲ爲ササルヘカラス
 即時抗告ヲ以テ不服ヲ申立テ得ル裁判手續ニ於テハ事件ヲ速ニ終結セシ
 メ且ツ之ヲ確定セシムルコトヲ目的トスルヲ以テ同一審ニ於テ濫ニ之ヲ
 變更スルトキハ徒ニ事件ノ結局ヲ遲滯セシメ本來ノ目的ヲ没却スヘキヲ
 以テ之カ取消又ハ變更ヲ許ササルナリ

裁判ハ裁判シタル時ヨリ效力ヲ生スルヲ原則トスレトモ同一審又ハ抗告審ニ
 於テ爲サレタル變更ノ裁判ハ變更シタル時ヨリ (Ex Nunc) 效力ヲ生スルヤ將タ
 遡及效即チ取消サレタル原裁判ヲ爲シタル當時ヨリ (Ex Tunc) 效力ヲ生スルヤ
 ニ就テハ法律上何等ノ規定ナキヲ以テ事件ノ性質ニ從ヒ裁判所之ヲ決スヘキ
 モノナリ但疑ハシキ場合ニ於テハ取消ノ裁判ヲ爲シタル時ヨリ效力ヲ生スヘ
 キモノト解釋スルヲ相當トス(尤モ當然無効ナル裁判ヲ取消シタル裁判ハ單ニ
 無効ヲ宣言スルニ過キヌシテ原裁判ハ取消ササルモ效力ナキヲ以テ此問題ヨ
 リ除外スヘキモノトス)

第四節 抗告手續

民事訴訟ニ於ケル上訴ノ方法ハ控訴、上告及ヒ抗告ノ三種アルモ非訟事件ニ於
 ケル上訴方法ハ唯抗告ノ一アルノミ非訟事件ニ於ケル抗告トハ下級裁判所ノ
 裁判ニ依リテ權利ヲ害セラレタル關係人ヨリ上級裁判所ニ對シテ形式上未ダ
 確定セザル裁判ノ取消ヲ求ムル不服ノ申立ナリ而シテ抗告ハ單ニ裁判ニ依リ

ヲ權利ヲ害セラレタル者ニ限り之ヲ爲スコトヲ得ルモノトス茲ニ權利トハ私權又ハ公權ノ孰レタルヲ問ハスト雖モ單純ノ希望ノ如キハ元ヨリ此中ニ包含セサルナリ例之裁判所ハ親族會ノ決議ニ代ルヘキ裁判トシテ被相續人ノ兄弟數人中ノ一人ヲ相續人ニ選定ノ決定ヲ爲シタル場合ニ假令他人ノ人ニシテ選定ニ當ラントスル希望ヲ有スルモ抗告ヲ爲シ得ル限リニ非サルカ如シ又權利ノ侵害ハ直接ナラサルヘカラス唯申立ニ因リテノミ裁判ヲ爲スヘキ場合ニ於テ其申立ヲ却下シタル時ハ申立人ノミニ抗告ノ權利アルモトス蓋シ此場合ニ於テ申立人以外ノ者カ假如權利ヲ害セラレタリトスルモ畢竟是レ間接ノ侵害ニ過キサルヲ以テナリ然レトモ抗告ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノニ非ス或裁判ニ對シテ抗告ヲ申立ツルコトヲ得サル場合アリ即チ本法第四十條第一項第五十二條第三項第八十九條第九十條第三項第一百條第二項第一百八條第一項第一百三十二條第二項第一百三十七條ノ場合ノ如キ是レナリ又假令權利ヲ害セラレサルモ抗告ヲ爲シ得ル者アリ本法第九十一條第二項第九十二條第二項第九十五條第一項第一百一條第二項第一百二條第二項第一百三十五條

第一項就賣法第二十七條第三項第三二條ニ規定セル者ノ如キ是レナリ抗告ハ尙ホ手續費用ノ裁判ニ付テハ其負擔ヲ命セラレタル者ニ限り抗告ヲ申立ツルコトヲ得但シ費用ノ點ニ限リタル裁判ニ付テハ本案事件ノ裁判ニ對シ許スヘキ抗告ヲ提出シ且ツ追行スル時ニ限り之ヲ爲スコトヲ得ルモノトス(本法第三〇條、民事訴訟法第八二條第一項)

抗告ニハ民事訴訟法ニ於ケル如ク二種アリ通常抗告及ヒ即時抗告是レナリ一即時抗告トハ其提起ニ付キ期間ノ定アリテ法律上特ニ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ル旨ヲ掲ケタル抗告ヲ謂フ即チ本法第六十條第二項第七十七條第一項、第一百一條第一項、第一百二條第二項、第六十六條、第八十條第二項、第三項、第一百零一條、第二項、第二百二十九條、第三項、同條ノ二、第二項、第三百五十五條、第五百一十一條、第一項、第六百六十五條、第二百七十七條、第三項ニ掲ケタルモノノ如キ是レナリ而シテ之カ提起ハ七日ノ不變期間内ニ爲スコトヲ要ス(本法第二五條、民事訴訟法第四六六條)此不變期間ハ一般ニ裁判ノ告知ノ日ヨリ起算スヘキモノニシテ(本法第二二條第一項第六〇條、第二項第七七條、第二項第一〇八

條第四項第一一〇條第二項其計算方法ハ本法第十條及七民事訴訟法第百六十五條ニ依リ言渡又ハ送達ヲ以テ告知シタルトキハ其翌日ヨリ起算スヘキモノトス

若シ天災其他避クヘカラサル事變ノ爲メ此不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル當事者ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許スヘキモノトス此原狀回復ハ障礙ノ止ミタル日ヨリ十四日ノ期間内ニ申立ツルコトヲ要スルモノニシテ其後ニ於テハ之ヲ爲スコトヲ得サルモノトス(本法第二二條第二項民事訴訟法第七四條第一七五條尙ホ原狀回復ノ手續ニ付テハ民事訴訟法第百七十六條ヲ參照スヘシ)

原裁判所ニ對シ再審ヲ求ムル訴ノ要件存スルトキハ不變期間ノ滿了後ト雖モ再審ノ訴ノ爲メ定メタル期間内ハ尙ホ抗告ヲ提起スルコトヲ得ヘシ(本法第二五條民事訴訟法第四六六條第三項)

即時抗告ハ不變期間内ニ爲ササル可カラサルヲ以テ其期間ヲ徒過スルトキハ其裁判ハ確定スルモノトス從テ即時抗告ヲ爲シ得ヘキ裁判ハ確定シ得ヘ

キ裁判ナルコトニ注意スヘシ

二、通常抗告トハ即時抗告ニ非サル普通ノ抗告ヲ謂フ即チ其提起ニ付キ期間ノ定ナキモノナリ從テ一般ノ場合ニ於テハ通常抗告ヲ以テ不服ノ申立ヲ爲シ得ヘキ裁判ハ確定シ得ヘキ裁判ニ非ス然レトモ通常抗告ヲ以テ不服ヲ申立テ得ヘキ裁判カ即時抗告ヲ以テ不服ヲ申立テ得ヘキ裁判ノ準備手續ニ過キサル場合ハ後ノ裁判カ確定スル結果前裁判モ亦確定スル結果ヲ生スルモノナリ例之競賣法ニ依ル競賣事件ニ於テ競賣開始決定ハ通常抗告ヲ以テ不服ヲ申立テ得ヘキ裁判ナルモ競落許可決定カ即時抗告ヲ以テ不服ヲ申立テ得ヘキ裁判ナルニ依リ競落許可決定ノ確定ノ結果競賣開始決定モ亦確定スルカ如シ

抗告權ハ真正ニ關係人ノ權利ナルカ故ニ職權ニ因リ開始セラレタル手續ニ於ケル裁判ニ對シテモ關係人ハ此權利ノ行使ヲ爲スコトヲ得ルナリ上級裁判所ハ申立ナキニ拘ハラズ職權ヲ以テ下級裁判所ノ裁判ヲ取消スコトヲ得サルモノトス此抗告權ハ關係人ノ權利ナル結果抗告人ハ自己ノ抗告ニ付キ抗告裁判

所ノ裁判アルマテハ任意ニ取下ヲ爲シ得ルモ若シ抗告裁判所ノ裁判アリタル後ハ最早抗告人ハ其抗告ヲ取下クルコトヲ得ス是レ關係人ハ裁判所ノ裁判ヲ變更スル力ヲ有セザレハナリ取下ノ形式ニ付テハ法律上特別ノ明文ナシ從テ本法第八條ニ準シテ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ抗告ノ取下以後ニ爲シタル抗告裁判所ノ裁判ハ裁判ヲ爲スヘキ要件ヲ欠缺スルヲ以テ無効ナリ然レトモ原裁判所ハ抗告ノ取下以後ニ於テ自己ノ裁判ヲ取消シ又ハ變更スルコトヲ得ルヤ論ヲ俟タス

抗告ノ提起前ニ抗告權ヲ拋棄スルコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ議論アリテウスニラツ氏ハ拋棄スルコトヲ得ト説明シ「ジュリチ及ヒビルケンビル」ノ兩氏ハ拋棄スルコトヲ得スト論セリ余輩ハ後説ヲ採用ス蓋シ非訟事件ニ付テハ相手方タルモノナキカ故ニ抗告權ヲ拋棄スルトスルモ單ニ裁判所ニ對シテ意思表示ヲ爲スニ過キス而モ裁判所ハ關係人ノ抗告權ノ拋棄ニ因リ毫モ實體上ノ利害關係ヲ來スモノニ非サルヲ以テ其拋棄ハ何等實益ナキモノナレハナリ
抗告審ニ於ケル手続ハ第一審ニ於ケル手続ト同一ナリ從テ特別ノ規定ナキ限

ヲハ余輩ノ前述セシ手続ハ第一審タルト將タ抗告審タルトヲ問ハス總テ之ヲ適用スヘキモノニシテ抗告裁判所ハ自ら必要ナル事實ノ探知又ハ適當ト認メタル證據調ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ
抗告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ先チ其抗告カ適法ナルヤ否ヤ又即時抗告ニ付テハ其抗告カ期間内ニ提起セラレタルヤ否ヤヲ調査スヘキモノトス若シ抗告ニシテ不適式ナルカ又ハ期間内ニ提起セラレザルトキハ其抗告ヲ不適法トシテ棄却セザルヘカラス又抗告裁判所ハ果シテ抗告權アル者ヨリ抗告ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査スヘキモノトス若シ利害關係人ニ非サル者又ハ裁判ニ因リ權利ヲ害セラレザル者ヨリ抗告ヲ提起セル場合ニ在リテハ抗告ヲ不適法トシテ却下セザルヘカラス
抗告カ適法ナル時ハ進シテ其内容ニ付キ審査スヘキモノトス然レトモ裁判所ハ關係人ヨリ申立テタル抗告ニ付テハ性質上抗告人ノ利益ノ爲メニノミ原裁判ヲ變更スルコトヲ得ヘキモ決シテ抗告人ノ不利益ニ之ヲ變更スルコトヲ得サルナリ (Von Reformatio in Rejus) 又抗告人ノ申立以外ノ事項ニ付キ審査及ヒ裁

判ヲ爲スコトヲ得ス從テ二箇ノ裁判アル場合ニ於テ抗告人カ其一ノミニ對シテ抗告ヲ爲シタルトキニ抗告裁判所ハ他ノ裁判ヲ取消シ又ハ變更スルコトヲ得サルナリ

抗告裁判所カ審理ノ結果抗告ヲ理由ナシト認メタルトキハ抗告ハ棄却スヘキモノトス之ニ反シテ抗告ヲ適法ニシテ且理由アリト認メタルトキハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ら更ニ裁判ヲ爲スカ若クハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得ルナリ(本法第二五條、民事訴訟法第四六四條)而シテ更ニ裁判ヲ爲サシムルコトヲ委任スルト否トハ専ラ抗告裁判所ノ自由ノ判斷ニ屬スルモ抗告裁判所カ自ら爲スコトヲ得サル裁判例之說賣開始決定ノ如キハ第一審裁判所ニ委任シテ爲サシムヘキモノトス

抗告裁判所ノ裁判ニハ理由ヲ附スルヲ要ス(本法第二三條)非訟事件ニ於ケル裁判ハ前述セル如ク何等ノ形式ヲ要セサルニ拘ハラズ抗告裁判所ノ裁判ニ限リ理由ヲ附スル所以ハ元來抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ一般ノ抗告ノ場合ト異

ナリ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限り更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ルモノナルヲ以テ(本法第二四條)果シテ法律ニ違背シタルヤ否ヤハ理由ヲ明示スルニ非サレハ之ヲ知り得ヘカラサレハナリ

抗告裁判所ノ裁判カ法律ニ違背シタルトキハ通常抗告ナルト將タ即時抗告ニ基キタル場合ナルトヲ問ハズ再抗告ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ(如何ナル場合カ、法律ニ違背シタルヤハ本法第二四條ニ基キ民事訴訟法第四三五條及ヒ第四三六條ヲ參照スヘシ)然レトモ所謂再抗告裁判所ハ抗告審ノ裁判カ假令法律ニ違背スルモ他ノ理由ニ因リ結局裁判ノ正當ナル時ハ再抗告ヲ棄却スヘキモノトス(本法第二四條第二項、民事訴訟法第四五三條)

即時抗告ニ基キ爲シタル抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ抗告裁判所ノ裁判ニ對スル再抗告モ亦即時抗告ナルヤ將タ通常抗告ナルヤニ付テハ法律上何等ノ明文ナキヲ以テ聊カ疑ナキニ非ス然レトモ同ク即時抗告ナルコトハ訴訟法學者間ニ爭ナキ所ニシテ即時抗告ノ性質上當然ナリト思慮ス

抗告ハ特ニ定メタル場合ヲ除ク外執行停止ノ效力ヲ有セス(本法第二一條)是レ

當然ノ規定ニシテ非訟事件ニ於テハ範圍廣キヨリ抗告ニ執行停止ノ效力ヲ付與スル時ハ畢竟理由ナキ抗告ノ續發スル弊ヲ生スルヲ以テナリ
 抗告手續ニ付テハ以上述ヘタル外本法第二十五條ニ依リ民事訴訟法第四百五十六條第一項第四百五十七條第四百五十八條第四百五十九條末段第四百六十六條及ヒ第四百六十一條ヲ準用スヘキモノトス

第四章 費用ノ負擔

非訟事件ニ於テハ民事訴訟ニ於ケルト同シク事件ノ開始ヨリ其完結ニ至ルマテ印紙料ヲ始トシ事實ノ探知及ヒ證據調ノ費用裁判ノ告知ニ要スル送達料等諸般ノ費用ヲ要スヘシ此等ノ費用ニ付キ何人カ負擔スヘキヤヲ定メザルトキハ後日其費用ノ支出ニ關シテ紛擾ヲ生スル虞アルヘシ之ヲ以テ非訟事件手續法ニ於テモ手續費用ノ負擔者ヲ定メ手續費用ハ原則トシテ申立人ニ負擔セシム(本法第二六條然レトモ或場合ニ於テハ却テ其當ヲ得サル事アルヲ以テ本法ハ右ニ對スル例外ヲ設ケタリ)

一、檢事ノ申立ラタル場合ニ於テハ檢事ハ公益ノ爲メ國家ヲ代表シテ申立ラタルモノナルヲ以テ元ヨリ檢事其人ニ負擔セシムヘキモノニ非サルヲ以テ國家ノ負擔スヘキモノトセリ(本法第二六條但書)

二、本法ニ於テ手續ノ費用ニ付キ特ニ負擔者ヲ定メタル場合ニ於テハ元ヨリ此特別規定ニ從ハサル可ラス例之本法第六十一條第六十二條第七十八條第八十一條第三項第八十三條二ノ第二項第八十四條第二項第八十七條第九十四條第二項第九十六條第二項第九十七條第二項第九十八條第二項第一百七條第三項第九十九條第二項第一百六條第三十五條第二項第二百七條第四項第五項等ノ如キ場合はレナリ

三、特別ノ事情アルトキハ裁判所ハ本法ノ規定ニ依リテ費用ヲ負擔スヘキモノニ非サル關係人ニ費用ノ全部又ハ一部ノ負擔ヲ命スルコトヲ得ルナリ(本法第二八條蓋シ費用ノ負擔者ハ本法ノ規定ニ依リテ一定セルモ此規定ヲ遵守センカ時トシテ不當ノ結果ヲ生スルナキヲ保セス本法第六十一條ニ依レハ彼ノ不在者ノ財産管理費用ハ不在者ノ負擔スヘキモノナレトモ

利害關係人カ封印除去ニ對スル不當ノ異議ノ爲メニ手續ノ費用ヲ増加スルトキハ其不當ノ異議ヲ爲シタル關係人ニ對シ之ニ依リテ生シタル増加費用ヲ負擔セシムル方公平ナルコトアリ得レハナリ

以上第一第二ノ場合ニ於テハ費用ハ何人ノ負擔スヘキモノナルカハ各本條ノ規定ニ依リ一定セルヲ以テ多クノ場合ハ別ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス必要ナキカ如シ然レトモ裁判ニ對シ抗告ヲ爲シタル場合ニ於テハ時トシテ之カ裁判ヲ必要トスルコトアリ右三ノ場合ニ於テ費用ノ負擔者ヲ定メサルニ於テハ何人ノ負擔スヘキモノナルヤ明瞭ナラサルヲ以テ裁判所ト手續費用ニ付キ裁判ヲ爲ササルヘカラス而シテ民事訴訟ニ在リテハ判決ニ依リ其數額ヲ一定スルコトナク別ニ費用額ノ確定決定ニ依リ始メテ其額ヲ一定スルモノナルモ非訟事件ニ在テハ簡易迅速ヲ向テ結果豫メ本案事件ノ裁判ト共ニ費用額ヲ確定シテ裁判スヘキモノト爲セリ本法第二七條

既ニ負擔スヘキ費用額確定シタル以上負擔者一人ナルトキハ別ニ減ハサルモ人數共同シテ費用ヲ負擔スヘキ場合ニ於テハ其義務ハ連帶ナルカ將テ平等ナ

雜 報

○町村助役ト戸籍及ヒ身分登記事務ノ管掌 町村助役ハ戸籍法第三條ノ場合ニ於テノミ戸籍及ヒ身分登記ニ關スル事務ヲ行フモノト爲スヘキカ戸籍法第一條第二條町村制第七〇條其條ヲナルコトハ下ニ示ス所ノ大審院判例ニ依リテ明カナリトス其判決理由ニ曰ク戸籍法第一條ニ依レハ戸籍及ヒ身分登記ニ關スル事務ハ戸籍吏ノ管掌スヘキモノニシテ其第二條ニ依レハ戸籍吏トシテ之ヲ管掌スヘキ者ハ市町村長ナリトス而シテ戸籍及ヒ身分登記ニ關スル事務ハ廣義ニ於ケル國ノ行政ニ關スルモノニシテ市制第七十四條第一項第三號及ヒ町村制第六十九條第一項第三號ニ所謂國ノ行政事務ニ外ナラサルヲ以テ市制第七十四條第二項又ハ町村制第六十九條第二項ニ依リ監督官廳ノ許可ヲ得テ市參事會員ノ一名又ハ助役ニ其事務ヲ分掌セシムルコトヲ得ルノミナラス市制第六十九條又ハ町村制第七十條第三項ニ依リ市長又ハ町村長故障アル場合ニ代理ヲ爲スヘキ市參事會員又ハ助役ハ戸籍吏トシテ市長又ハ町村長カ

管掌セヘキ戸籍及ヒ身分登記ニ關スル事務ニ付ラモ亦之ヲ代理スル權限ヲ有
 スルモノトナシ然レハ市參事會員又ハ助役カ監督官廳ニ依リ戸籍及ヒ身分登記
 ニ關スル事務ヲ管掌シ又ハ法律上市長若クハ町村長ヲ代理シテ之ヲ管掌スル
 場合ニ於テ其管掌ニ係ル戸籍又ハ身分登記ニ關スル文書ヲ偽造又ハ變造シタ
 ルトハ刑法第二百五條第一項ノ適用ヲ受クヘキコト當然ナリトス(大審院明
 事判明治三十七年九月二日第二依明部宣告)

○町村役場書記ト監守盜罪ニ關シテ町村役場ノ書記ハ町村長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス
 (キコト)ハ町村制第七十二條ニ依リ明カナル所ナルト同時ニ書記ハ町村ノ取
 扱ニ屬スル金錢ニ對シテ自己ハ保管ニ在ルヲ奇貨トシ之ヲ費消シタルトキハ刑
 法第二百八十九條ノ罪所關監守盜罪ヲ以テ問擬スヘキカ成ハ書記ハ金錢出納
 並ニ保管ノ權限ナキモ其罪ヲ通常ノ委託物費消罪刑法第三九五條ニ關
 シテモナカレ大審院ハ下ノ如キ理由ヲ下ニ監守盜罪ヲ構成スルモノトセ
 リ其判決理由ニ曰ク「町村制第七十二條ニヨリ書記ハ町村長ニ屬シ庶務ヲ分掌
 スルモノナルヲ以テ其町村固有ノ事務タルト法律命令又ハ上司ノ命令ニヨリ

町村長ニ委任シタル事務タルト問ハス苟モ自己ノ分掌ニ屬スル以上ハ之ヲ
 取扱フヘキ職務權限ヲ有スルコト勿論ナルノミナラス町村制第七十一條ニ收
 入役ハ町村ノ收入ヲ管領シ其費用ヲ支拂フ爲シ其他會計事務ヲ掌ルトアル
 事ニ關シテ收入役ハ職務ハ町村ノ收入ヲ受領スルニ限リ又法律命令又ハ上司ノ
 命令ニヨリ直接町村長ニ委任シタルモノモシテ町村ニ屬セザル金員等ノ收受
 ニ關シテモ尙モ收入役ヲシテ收受セシムルモノニアラザルコト明カナリ又以
 テ本件實動局ヨリ坂本卯之助ニ下付スヘキ金券ハ收入役ニヨラスシテ其命令
 ヲ受ケタル町村長ニ於テ直ニ之ヲ收受シ保管スヘキモノナルコト疑ナキ所ナリ
 トス已ニ然ラハ町村長ノ命ニヨリ兼テ此等ノ事務ヲ掌ルノ職責アル被管ニ於テ
 右ノ金券ヲ郡役所ヨリ受領シ保管スル際ニ於テ之ヲ自己ノ用途ニ費消シタル
 トキハ其監守盜罪ヲ構成スルハ勿論ナルヲ以テ云云ト(大審院明治三十七年九月二
 日第三十七號部宣告)

○特許法第四十七條ニ所謂詐偽ノ所爲ナル意義 特許法第四十七條ノ規定
 ニ依レハ詐偽ノ所爲ヲ以テ特許ヲ受ケタル者ハ十五日以上一年以下ノ重懲罰

又ハ十面以上三百圓以下ノ罰金ニ處セラルルモノトス本條ニ所謂詐僞ノ所爲トハ特許ヲ得ルニ付キ何等カノ詐術ヲ施シタルコトヲ要スルノ意ナルカ將タ單ニ事實ヲ隱蔽シタルノミヲ以テ足レルカ大審院ハ判決シテ曰ク「特許法第四十七條ニ詐僞ノ所爲ヲ以テトアルハ民法第二十條ニ詐術ヲ用キテアアルヨリモ一層汎博ナル意義ヲ有シ詐術ヲ用キタル場合ノ外向ホ人ヲ錯誤ニ陥ラシムヘキ偽言ヲ用キタル場合ヲモ包含スルコト勿論ナレハ本條ノ犯罪構成ニ付テハ必スシモ詐術ヲ用キタル事實アルコトヲ要セス苟モ人ヲ錯誤ニ陥ラシムヘキ偽言ヲ用キタル之ニ因テ以テ特許ヲ得タル事實アル以上ハ其罪ヲ構成ス故ニ原院ニ於テ被告カ牙子ヲ付シタル継続ハ公知公用ノモノナルニ拘ハラス斯カル事實ナシトシ被告自ラ發明シタルモノノ如ク詐稱シテ審議官吏ヲ欺キ特許ヲ得タル事實ヲ認メ特許法第四十七條ヲ適用處斷シタルハ相當ニシテ云々ト

(大審院明治三十七年九月八日第一九三號特許法違犯事件) 其の會報(特許法違犯事件) 其の會報(特許法違犯事件)

法學志林

第七卷 第二號
二月十日發行
每月一回十日發行
定價一冊拾貳錢
十冊前金壹拾貳錢
壹圓貳拾錢共

(第六十六號)

◎志林

第二回平和會議ト義務の仲裁々列
法人ノ能力ヲ論ス
最近判例批評(其二十七)
討論批評及自家ノ見解(續)
養子論

法學士 松本原
法學士 梅勝謙 一
法學士 佐本 次
法學士 竹識 三
法學士 田島直 吾
法學士 水去堂 久
法學士 森久 吉

◎纂論

露國新手法(十三、完)
被害者ノ屬託ト殺傷罪トノ關係
有價證券ノ利札質入ノ效力及其性質
地方裁判所支部ノ廢止ニ就テ
憲政本黨ノ對滿州策ニ就テ

法學士 松本原
法學士 梅勝謙 一
法學士 佐本 次
法學士 竹識 三
法學士 田島直 吾
法學士 水去堂 久
法學士 森久 吉

◎解疑

中立侵犯問題ニ關スル我政府ノ辯駁
○裁判所構成法改正案
○華川事件ノ判決
○手錠借用
○檢事紀念嘉賓君ノ辭職一件
○百年以上ノ外國人地上權
○收養件
○數

法學士 松本原
法學士 梅勝謙 一
法學士 佐本 次
法學士 竹識 三
法學士 田島直 吾
法學士 水去堂 久
法學士 森久 吉

◎寄書

大審院新判決例 二十九件

法學士 松本原
法學士 梅勝謙 一
法學士 佐本 次
法學士 竹識 三
法學士 田島直 吾
法學士 水去堂 久
法學士 森久 吉

◎判例

擬律擬判試驗答案及批評

法學士 松本原
法學士 梅勝謙 一
法學士 佐本 次
法學士 竹識 三
法學士 田島直 吾
法學士 水去堂 久
法學士 森久 吉

◎雜報

學則ノ改正
○講師ノ招聘
○講議會
○校內懸賞討論會
○法政速成科講義
○校友茶話會
○校友會
○旅順陷落祝賀會
○清國留學生ノ監獄參觀
○圖書購入資金寄附者
○校友

法學士 松本原
法學士 梅勝謙 一
法學士 佐本 次
法學士 竹識 三
法學士 田島直 吾
法學士 水去堂 久
法學士 森久 吉

二月

法政大學

○廣告

法政速成科講義錄

每月二回發行
第二號 二月廿日發行

- 題辭 司法大臣 波多野敬直閣下
- 肖像 法學博士 富井 政章先生
- 刑法總論 法學博士 岡田 朝太郎
- 國際公法 法學博士 中村 進午
- 裁判所構成法 法學士 岩田 一郎
- 經濟學 法學士 山崎 覺次郎
- 雜錄 ○去年我邦及東洋諸國間貿易
- 本講義錄總以漢文記述法律政治經濟等之學科
- 者也 ○校外生月謝金五十錢 ○一冊代金三十錢

二月 法政大學

(明治三十六年十月十二日第三種郵便物認可)
(每月四回七月八日十八日二十八日發行)

明治三十八年三月四日印刷
明治三十八年三月七日發行

(定價金貳拾錢)

編輯者 東京市牛込區牛込北町十番地 萩原敬之

印刷者 東京市牛込區矢來町三番地 小宮山信好

印刷所 東京市芝區西ノ久保町十一番地 金子活版所

發行所 東京市麴町區富士見町六丁目十六番地

指 司法省 法政大學

(電話番町百七十四番)